

探検部の次代を担う若き血はいま

——1・2回生 初心を綴る——

1回生(25代)

探検雑考

伊林奈美

「探検」と言う言葉から人は何を心に思い浮かべるのだろうか、私は以前注意してその反応を観察した事があった。その殆どが何やら意味あり気な薄笑いを浮かべたり、訝しように人の顔をまじまじ見つめるのであった。憶測するに、どうも探検口体がフィクションの次元から脱却できずにいるらしい。と言うのは探検も冒険も平板な日常性にまず実現できそうもないドリーミーな一抹の清涼剤として同類項であり(時にはまったく同質であると誤解されるが)、その一般のイメージの根幹には明らかにターザンの発想が在る。ロマンスチックヒーローを主人公として演じられる探検物語を鑑賞する傍聴者の態度が固定されているのだ。居心地の良い部屋で例えば映像を通して、何の危険もなく、冒険を楽しむ人々は秘かにその主人公に自分を投影し、精神の娯楽として昇華しているのかもしれない。

その日常性との断隔のために、アウトサイダー的要素を「探検」が含まれていると考えられるかもしれない。つまり自分と無関係な次元に「探検」を追いやってどのような影響も人々は受けないでおこうとするのである。

しかしその性質は生来もっと人間に対する包括的な意味を持っていたはずなのだ。文明が進み生命の保証、生活の保証がされると、その確保され

た個人単位的生活を守る事だけに情熱を傾ける人々によって、より大きな可能性が拒絶され始めたのである。もちろん一甲斐には言えないが、そして無謀でない冒険と危険のない危機感で満足する。

「探検」は一つの大きな夢であった。又生きる事に直接かかわっていた生活の手段でもあった。現在安楽な生活と引き換えにその脈々と営まれてきた絶えまない努力が忘れられているとすれば、「探検」の意味が甚だしく曲解されているのも当然と言えなくはないが、価値が物質文化にのみあるとは考えなくはないのである。

探検に思う

井上友義

私が高校時代の友人に、「探検部に入ってるんだ」と言うと、みんなが大笑いして「へえお前らしいよ。」と言う。彼らはみな、私の言っている「探検」という言葉を取り違えているように思う。つまり、「探検」イコール「冒険」と考えているようである。私には「探検」よりむしろ「冒険」いや「探検」の方が似合っていると言うのである。私はさらに、彼らはこの冒険も、何か少年時代の冒険ごっこだとも思っているように思う。

確かに、現在、探検と呼ぶにふさわしい地というものは、ほとんどない。しかも、極わずかなゆえ、それを究めることは、高度な技術と、多くの知識と、多額の資本を必要とし、大学生活のみ探検をかじろうとする我々にはとうてい不可能に近い。となれば、私の友人が何気なく考えたように、我

々の探検というものは、もはや、冒険としてののみしか存在し得ないのであろうか。

我々の合宿のほとんどが、トレーニング合宿でしかない。すべて本番の探検のために、常に、未踏の地の探検のみを夢見て、数々の合宿にのぞんでいかなければならないはずである。しかしながら、先にも述べたように、本来の探検と呼べるものは、なかなか実現しがたく、夢に近い。特に私のような1回生にとっては、まったく非現実の世界である。そう考えると、この遠い目標を日ざす前に、私はもっと身近に探検というものを感じたいと思ったりする。

身近に探検を感じるということは、要するに、私の行くところはすべて、私にとって探検の地であるとしたのである。自分自身の立場と条件の許で、自分自身のために、自分自身の探検を行いたいと思う。そして、自分というものを探検して行きたい。

そして、そこに、本来の未知への探検が生まれていると思う。

僕の探検論 大藪 泰昌

探検——人はこの言葉からどんなことを連想するだろうか。密着と生い茂るジャングルの中を黙々と進んで行く姿か。幾千メートルもの地下、神秘的なドラマを織りなす鍾乳洞へと息を吞んで進んで行く姿だろうか。この言葉には、アフリカの土人達が打ち鳴らす太鼓の、力強いリズムを彷彿とさせる何かを、人間たちの持つ激しい情念の様なものを感じさせる力がある。

僕は探検部という存在を知った時、少年時代から過ずる浪漫の様な、何やら言い知れぬ喜びを背中に感じる気がした。自分は、一年間予備校生活を送ってきたせいか冒険に飢えていたし、このクラブにはあらゆる可能性が集約されている様で、

とても興味深いものだった。

しかし、いざ探検部に入ってみると「何か違うな。」と感じるのである。何が違うのだろうか。今クラブで毎日やっていることが、——人類未踏の地へ足を踏み入れる——ことに直接つながっている気がしないからだ。それには、むしろ僕の勉強不足ということもあるだろう。だが、現在の探検とは、僕が頭に描いていた様な事とは、性格が異なってきたようである。つまり、今日では人類未踏の地というのはかなり少なくなって、残っているのはヒマラヤなどの高い高い山の頂上か、海の深い深い所ぐらいしかなくなってしまった。そこで視野を転換し、今まで何度も人が当然足を踏み入れている様な場所を違った角度から見つめ直すというのである。簡単に言うところこれは先輩が話してくれたのだが、今までは川を下ってばかりだったが、今度は逆に川を遡ってみるということである。

僕としては、昔のオーソドックスな探検の方を望んでいるのだが、人類は絶えず進歩を続けているし、時は流れているのだから仕方がない。それなりに面白い所を探していきたいし、それにはいろんな資料などを、頭に入れていく必要があると思うし、これからの季節が秋だというのは、実に都合がいい。ガンガン頑張っていこうと思う。

今後の探検 織田 晃 敏

「探検」という言葉を真の意味で理解し、行動に移そうとするなら、実問題、学生的身である自分に何が出来るだろうか。

地理的にも学術的にも以前は探検的価値を十分に持っていたと思われるフィールドも、現代では、文明の発達につれ、一部の「探検家」と呼ばれる人々、また関大を始めとする各大学探検部などの活動によって、様々な手段、独自の目的を持って

遂行されてきた。それ故、自分がもし、真の意味の探検活動に取り組んで行こうとするなら不可能に近いような気がする。しかし、過去に成し遂げられた、種々多様な探検的行為も、観点を変えてみれば、手段、目的などをアレンジすることにより、まだまだ探検する価値があるように思う。また、たとえ真の探検の意味から大きく、ずれているとしても身近なところにも、探検し得るフィールドがあるのではないか。それを見つけて行くには、柔軟な頭でもって物事を思考し、あらゆる角度から追求して行く姿勢が大切だと思う。

今後、自分としては、最初から真の意味での探検活動は不可能だと決めてかからず、探検のフィールドを捜して行きたいし、少しでも真の探検に近づきたいと思う。

探検について 大日方 昭

探検という言葉は、なんとなく人の興味をそそり、おもしろそうな印象を与える言葉だと思う。僕もその言葉にひかれてこのクラブに入った。しかし実際はどうであろうか。しんどい毎日毎日のトレーニング、きびしい外苑合宿、そして夏合宿もしんどかったという印象しかなかったという事実は、自分が入る前に予想していたのとは、かなりちがっていた。そして現在に至っては、これから何をやっていこうという目標もなく、またこれといってやりたいということも別になく、まだ何となく毎日を惰性で過ごしているという状態である。こうした状態をどのように自分なりに解決してゆくかということが、これからの課題である。

次にこれからの探検については、やはりよく言われているように、発想の転換が必要だと思う。オーソドックスな形式にとらわれずに、探検という言葉にとらわれることなく、自由にのびのびとやることが、すばらしい発想を生み出すかもしれ

ないし、これからの時代に適していると思う。たとえば、その典型的な例が、今年行われた広島大学探検部の、瀬戸内海を歩いてわたるような、そういう発想が必要な時代であると思う。

それにあと大切であると思われることは、幅広い知識を持つということである。「知識は力なり」という言葉もあるとおり、技術も大切だが、いろいろ本を読み、勉強することは、役立つものだと思う。

探検について 佐々木孝夫

探検という言葉を聞くと、僕は、やはり冒険的要素を含むものを考えていたが、探検部に入って必ずしもそうでない事も知った。それは民族調査だが、部では認められてはいるが、自分には全くそうだと思えない所もある。しかし、自分は民族調査に関して、ほとんどわかってはいないので、それを自分の目で確かめてみないとはいきりした結論はだせないと思う。今までに部では、海外・国内といろいろな探検をやってきたが、年々世界の到る所が知られるようになり、今ではその場所よりやり方に重点が置かれるようになったと思う。また、今どこへ行きたいと計画をたてても、いつ先を越されるかわからない状態で、これからはアイデア次第だと思える。それに探検をやっていくにはそれなりの計画の大きさが必要だと思う。ただ珍しい事をやればよいと言うわけではないだろう。今、我が探検部では、登山・ボート・ヨット・サバイバル民族調査があるが、これらはいろんな部の寄せ集めみたいなものでもあるから、また違った手段を考案していきたい。僕は、この探検部において、探究心・計画性・知識などが自分の身につくと思う。また正確な判断力・考察力なども養われるだろう。今僕はトレーニング合宿ばかりで、まだ探検の面白味がよくわからないが、早

くそれを味わいたいと思う。

探検部に入って 中嶋 哲

大学に入って半年がすぎ、ただただとろとろと生きていく日々がもったいないような気がしてきた。この大学生活でなにかしなければ、と思うようになった。そしてできればなにかやったという実感の得られることをしようと思い、探検部に入った。

このときはただ漠然と「探検活動をするんだ」と意気込んでいた。しかし今具体的に何をするか困っている、そして探検ということを真剣に考え始めている。

そもそも探検とは何なのだろうか。

辞書では「危険をおかして未知の世界を実地にさぐる」と書いてあったがこれでは全くはつきりしない。

単に探検といっても山、海、川、その他いろいろな所、地球上、あるいは空、宇宙と限りなく広い活動の場がある。

今、山プロジェクトのダンプッシュの仮計画書を見て計画の大きさに驚いた。そして全員が真剣に取り組んでいるのを見て感動した。

とにかく今はできるだけ多くの活動に参加して、それから自分の活動をだんだんと絞って行こうと思う。

海の上での探検 成瀬 暁一

探検とは、人が何かに興味を持ち、それに向かって身の危険を承知の上で挑戦し、征服することだろう。それには限りない広がりがある。世界中にはいまだ征服されていない地や、解き明かされていないもの、だれも挑戦していない事が数多く残っている。

今初めての長期合宿である夏合宿を終えて自分自身多くのものを学んだと思う。それがすぐに探検につながるとは思わなかったけれどもこのような地味な活動が積み重なって、すばらしい探検が実現するのだと思う。ここで合宿のことを振り返ってみると、僕はヨットプロジェクトで、瀬戸内海一周に参加したのであるが、ヨットに乗ることによって、海のすばらしさ、大きさ、おそろしさを知ることができた。これから何年後に挑戦することになるであろう瀬戸内海へのセーリングに向かって活動していきたいと思っている。またヨット以外にも、興味をひかれるようなものに数多くアタックしていくつもりである。そして、4年間の大学生活で自分自身満足のいく活動をし、これからのいけば探検の積み重ねであるだろう人生に活かしていきたい。

1・2 回生の文章を読んで先ず感じることとは、「みんな探検の定義に戸惑っているんだな」ということである。『探検とは何か』、探検を志した者全てがぶつかる古くて新しい命題である。私が1回生だった時には「探検部ができて20年も経っているのになぜはっきりと定義されていないのだろう」と少し腹立たしくさえ思ったものだが、見方を変えれば、答えがない分だけ可能性が大きく残されているとも言えるのではなかろうか。

新人諸君の努力と健闘を祈る。

探検部への抱負 日原 肇

大阪に来て、またたく間に半年が過ぎた。初めて親元を離れての大学生活、及び下宿生活は、本当にいろいろな事があり、一段落がついて自分を客観的に見る事ができるようになったのは、学園祭も終りのころだった。改めて自分を冷静に、みつめてみて、何か足りないものが自分にあるとしたら、それは、行動だろうと思った。これが、何かクラブに入ろうと思った動機です。そして、いろいろとクラブのガイダンスを受けてみたが、一番魅力あるように感じたのが、探検部だった。

さて探検部への抱負だが、まず「探検とは、何ぞや？」と言うことを国語辞典で調べてみると「危険をおかして未知の世界を、实地にさぐる」とあった。しかし真の探検とはそれだけでなく、加えてその底にある部分、つまり日ごろの絶え間ない周到な計画と読書による幅広い知識の獲得、日々のおくたりなき訓練を行うことによって、真の意義をもつのであろう。言葉を変えていえば、冒険そのものは、目的というよりは、手段にしかすぎず、探検の真の目的はその冒険によって培われる人間形成であると考ええる。今、探検部に入ったばかりのこの時点で思うことは、しばらくして過去をふりかえった時、今の時点の自分と比較して、確かに変わったなあと莞爾として微笑むことのできる人間に、なりたいということだ。

探検と旅 藤原 秀器

幼ない夢を実現できるのではないかと、思っ
て「探検部」なるものに入って一か月余り過ぎ去り
当然にしてふらあたるべき問題「探検とはいかな
るものなのか」に悩まされるようになった。本当
に自分はこの部の言うところの「探検」がしたい
のであろうかと。よく企画会議で「それは観光旅

行やで」と言うシビアな批判を聞かされる。そんな時「お前の探検指向も、観光旅行的なものではなかったか」と自問し、ここに座っていて良いものか、と危機を覚えずにはられない。

未知の土地に誰かが初めて入り（それを探検と言おうか）その土地は開発され、観光化していくという点で観光旅行とはそもそも探検活動の発展だと考えられないだろうか。両者の中間的存在として「旅」が掲げられると思う。

観光旅行がバスなどによる点から点への移動とすると「旅」はその道程である点を結んだ線においても意義を満たしてくれる。そこには人との出会いがあり、喜びがあり、悲しみがある。しかし両者共、根本的な目的は探検活動の遺産とも言えるであろうところの観光地、名所旧跡あるいは、人の住む安楽な地なのである。

しかし純粋な探検と言うか、未踏の地を目指すのは困難なようだ。と言うのは探検家、冒険家の先輩諸氏は、我々のフィールドを残しておいてくれている。そんな点で現代の探検において「旅」的性格を帯びるのは否めないのではないかと。

さて、私の探検指向なるものであるが、未知の領域のみでなく、一般に既知のものであっても、旅的要素が加わることによって探検活動は成り立つのではなかろうか、と思うのである。つまり未踏の山、河あるいは湖を踏破するばかりでなく、アスファルトの道路でも探検はできるのだと。その道程には人が居り、国境があり、社会がある。その道程で様々な人と交わることによって、国際的視野を得、それこそ未知の課題を見出すことになるかもしれない。

このように私は「自然に対する探検ではなく、「人間に対する探検」を指向するのである。

探検部に入って思うこと 松本直樹

僕が探検部に入部して2週間程がたったがこのクラブを選んだ動機は、大学に来て半年くらい過ぎたがその生活をふり返って見たとき、生活にしまったものが感じられず、何の刺激もないだらだらしたものであったことに気づいたからである。そこで、高校時代から興味をいだいていた探検部に入部することを決心した。そして入部して4日後に比良山系でのボッカを経験した。登山に関する知識が全くないのでボッカとはどんなものなのか想像もつかない。ただ重い荷物をかついで山を歩くというぐらいは聞いていた。そしてその当日、まさにかつて経験したことのない苦しみを味わった。そしてこのクラブのきびしさを強烈に思い知らされた。

今はまだクラブの活動に対してわからないことが数々あるが、これらを少しずつ知ってゆき、早くクラブにとけこみたいと思っている。そして探検についての多くの知識を得て、自分の目標をみつけ、それを成しとげたい。そして、クラブを通して大学生活を充実したものにしたいと思っている。

探検活動とアホ 室沢治久

「探検」この言葉には何か得体の知れぬ物が潜んでいるようだ。ありふれた日常生活に浸っている人間達に、「お前は未知の事物に対して関心がないのかーいや、あるだろう。やってみないか。おもしろいぜ」と語りかけてくるのではないだろうか。実際、自分が関大探検部に入った理由も、この「何かによる語りかけ」が耳に響いたからであると思われる。しかし、入部するという一步を踏み越えられたのは、やはり自分が「アホ」であったからかもしれない。この「アホ」について一言しておく、物事に夢中になれば、外で「よくや

るよ。物好きだねえ」と言いながら内で羨望の眼差しで見ている精神的老人ではない人の意である。世間一般の人が、未知の事物に対して少なからず興味や関心を持っているのに、探検活動ができないという理由は、危険や苦勞を伴う活動であるという一步が踏み越えられないからであろう。などと、独断と偏見で堅苦しく書いてしまった。

今年の夏合宿は、知床半島一周踏査(熊に出会い、オホーツクをカッパを着て泳いだ)や「野田ベゴの道」民俗調査(海外での民族調査トレーニング)合宿に参加した。今考えると、夏合宿に2つも参加したのは思慮不足であったと思う。しかし、2つの合宿に参加できたのは良い体験になったと思っているのも本当である。とにかく2つの夏合宿は、考えていた以上に、金銭的・時間的・肉体的・精神的問題が大きく押し掛かってきた。

最後に今後の抱負を書く。自分としては、民族調査と並行してボート(カヌー)をやって行くつもりである。民族調査という学術探検は、海外をフィールドとしなければ意味のないものになるであろう。自分が一回生である故に、数年後に計画書を出して海外に出て行くつもりである。ボートに関しても、海外の河川に目標を置き、トレーニングに励むつもりである。

